

月溪宛秋成書簡・『享和三年春寿算歌』紹介

長島 弘明

はじめに

ここで取り上げる架蔵の月溪宛秋成書簡（寛政三年正月十七日付）と『享和三年春寿算歌』は、平成二十二年七月から八月にかけて京都国立博物館で開催された「特別展観 没後200年記念 上田秋成」展に出品され、朝日新聞（「怪異作家 雅と俗」平22・7・2夕刊）や日本近世文学会編『上田秋成 没後二〇〇年記念』（平22・10）にも、写真（部分）とともに簡単な紹介をしておいたが、改めて全文を翻刻し、やや詳しい解説を加えるものである。

一、月溪宛秋成書簡（寛政三年正月十七日付）

「灰色の薄手の巻紙。秋成自筆（端裏に別筆で「無腸書翰」

と小さく墨書）。縦一三・六×横一〇七・〇浬。まず翻刻を掲げる。読みやすさを考え、句読点を補った。

新春千里同風、御世事之御加年申祝候。庵中は同事にて。一 旧年御繁務中、陶器御くたし、御あつらへかしこしとて、大三十日の夕さりつかた、畊庵みつから携へ来れり。鬼逃かてとはおもはるれと、閑人のほたへ過に、世路の御かた／＼を煩らはせ候事、罪かるからさるへし。大かた肥遯の人、ともすれば世の邪魔になり候事、慎むへし、／＼。さて又ひとつ破て四つに成てくたりしは、不幸歎、天の罪する歎、又壹年中に帰年の凶祥歎。それともあれ、是によりて、元旦雑煮を廢し、炊飯に菜汁、塩いはし、其うまき事言に尽しかたく、自歎して曰、月子は天下の巧手也、陶

工又名家也、そのの人々に物して、元日の宴をなす事、唯我独尊とおもひあかり候也。又旧国より洛の橘屋か千年鮓とかいへる果餅を餉来るに、大福のこい茶かきたて尼と我等独服のたのしみ、貴子などは人望の為に此安逸を不知。浪華中にさへえありはてぬ無藝者も、別に一天地ありて、今春にあふ事也。絵のあるさま彼茶人か云からきも歎。さてく風流の重器、庵中第一の物に生涯は秘し、臨死には棺中に納て黄泉までも愛玩いたすべく候。

所謂つきあかりなるへけれど、四つは宝ともいひかたき所有。今ひとつ喰よこせしかあり。猶わつらはすへき歎。御ゆるしあらは、のほし申へし。あこきナラハ、御返答に不及候。

一 菱湖子写本入手校合の事、凡半年余はと、めて、当の敵をうつへしと申たまへ。

一 去秋、黄檗門前の宿りの夜、初霜の身にしみしより、寒疝やら脚氣ヤラ、出府もひさしくせず、春になりて大かた怠りしかと、在庵僻又生して、於今出す。橋本に談候事あれは、暖をまちて上京をおもへと、いか、あらん。花の頃まではひさしけれど。

一 よし野行の贗書、さりととはつくくおとろき入。さて紀行はおもしろからず。生る紫暁を餉せしむの名士の計策

をのこせしにはあれと。

一 俳諧する事、しん酌の世の中、もとより人わらへなる赤下手、よきやめ時とは思へと、ほれたおやまをのいての二三日の心にて、すこしはさひしき春也き。

一 御愛妾へよろしく、尼も申すべく申たり。猶はかさねて申へし。いつもなからの乱書御免あれかし。不乙

正月十七日

呉伯望君

鶉兮

本書簡は、京博の展覧会では「呉春宛書状」の名で出陳されたもの。秋成の百通余（『文反古』『文反古稿』所収のものを除く）の手紙のうち、古い手紙は知られておらず、早いものでもすでに五十歳を過ぎた天明末年のものが数通あるのみである。しかもそれらは皆断簡であり、また写本や活字の形で伝わっていて、原簡は所在不明。現在、現物の所在が判明している中で一番古いものは、寛政元年（秋成五十六歳）十一月二十八日に書かれた月溪宛書簡である。それを含め、月溪宛書簡で今まで知られていたものは計七通で、いずれも天理図書館蔵『秋成書簡集』所収であるが、現存の秋成の手紙で二番目、三番目、四番目に古いものも、

やはりこの『秋成書簡集』に収まる、それぞれ寛政二年夏頃、同年六月二日、同年十二月十八日に書かれた月溪宛書簡である。松村月溪、四条派の始祖で画家の呉春として著名である。宝暦二年に生まれ、文化八年に六十歳で亡くなっているから、秋成より十八歳年下となる。本書簡も、同じく月溪宛（「伯望」は月溪の字）で、それらに続く五番目に古い現存の書簡ということになる。

本書簡が書かれた年次は寛政三年である。書中に、「よし野行の贗書、さりとほつく／＼おとろき入」ということばが見える。『よし野紀行』は、寛政元年十月二十三日に亡くなった几董の遺著で、寛政二年十月付の紫暁の序を付して刊行されている。この『よし野紀行』の出版については、月溪を間に挟んで、秋成と紫暁との間に多少のごたごたがあったことが、寛政二年六月二日の秋成の月溪宛書簡からわかる。すでに『日本人1000人の手紙』（「国文学」臨時増刊、昭和59・7）の「上田秋成〔松村月溪（呉春）宛〕」几董よし野紀行の序を拒絶する手紙」に書いた事があるが、その前後の経緯を要約すると以下の通りである。

几董没後、すぐに追善集の出版が企画され、門人の中でその編集に中心となって当たったが紫暁であった。しかし、費用を再三心配し、追善俳諧も采配できない紫暁の小心

翼々たる性格に、秋成は少し苛立ち気味である（寛政元年十一月二十八日付月溪宛書簡）。追善集の『鐘筑波』は寛政二年に刊行されたが、もう一つ、几董が亡くなった年（寛政元年）の三月二十日から月末にかけて、左言と吉野の桜見物に出かけた折の紀行を、『よし野紀行』として刊行しようという計画が進んでいた。秋成自身も前年に吉野に遊んで『いははし』を書いており、几董との間で吉野紀行をめぐる話がはずんだことであろう。現に『よし野紀行』には秋成の文体の影響も随所に認められ、また「友人無腸は」として『いははし』の文章を引用したところもある。寛政二年六月二日付月溪宛書簡を見ると、秋成は進んで「みの紙二枚」、すなわち大本の二丁分の長文の和文の序文を書き、さらに几董と両吟の「嵐山の花」の連句の草稿も用意していたようだが、板刻の費用がかさむから書き縮めてほしいとの紫暁の手紙を受け取り、「心さす所いよ／＼たかひ、せひとも此長文は御ことわり申たく候」と、序文の草稿を紫暁のもとから返却するように月溪に頼んでいる。例の癩癩を起こしてと思われるだろうが、そうではないと秋成は言っているものの、「この後はかたく御ことわり申上候」「夜半上」人（几董のこと）跡式事は、まつこれきりにて万事承るましく候」などという強いことばも見える。月溪

との交わりはともかく、夜半亭一門や俳壇と距離を置くようになるのはこの時からで、これがきっかけである。本書簡で、「俳諧する事、しん酌の世の中、もとより人わらへなる赤下手、よきやめ時とは思へど、ほれたおやまをのいての二三日の心にて、すこしはさひしき春也き」とある所から、秋成は俳壇の交わりだけでなく、俳諧制作そのものからも遠ざかっていったことが分かる。惚れた遊女と縁切りしてから二、三日後の心持ちだというのは、偽らざる心境であろう。

「よし野行の贗書、さりととはつく／＼おとろき人。さて紀行はおもしろからず。生る紫暁を齧せしむの名士の計策をのこせしにはあれと」という箇所、特に「贗書」と言っているのは、几董の文章を改竄しているという意味か、あるいはその後配されている付録の文章や連句、発句が気に入らなかつたものか。几董の『晋明集第五稿』にもこの『よし野紀行』の草稿が見え、板本とはあちこちに相違があるが、紫暁らの改竄がまつたくなひとは言えないものの、推敲は大部分は几董自身の手によるものであろうことは歴然としている。秋成の真意がどのあたりにあるのか、明確ではない。

以上のような経緯から、この書簡が寛政三年の正月のも

のであることは動かない。秋成は五十八歳、月溪は四十歳である。この頃秋成は、大坂市中を離れて郊外の淡路庄に隠棲中であつた。前々年の寛政元年には、同居していた妻の母、養母が相次いで没し（養母は大坂の別邸に滞在中に没）、前年の寛政二年（五月以前）には、一時夫婦仲もしつくり行かなくなつた妻のたまが剃髪し、六月には秋成自身もそこひにかかつて左眼を失明している。そういう状況であつた。この手紙が書かれたほぼ同時期に、『癩癩談』が成つて

いる。手紙の内容からすると説明の順序が逆になつたが、改めて冒頭から見ていきたい。前半は、月溪絵付けの陶器が大晦日に届いた礼を丁重に述べる。「畊庵」というのは京焼の陶工であろう。月溪が絵付けをし畊庵が焼いた器を、畊庵自身が京都から淡路庄まで運んできたのである。器は、飯を盛つたり、大福茶をたてたりしているところを見ると、茶碗様の器か。「旧国」は俳人の大江丸。橘屋の「千年餅」は、餅（求肥）の中に餡を入れた和菓子。しかし、五つ揃いの器のうち一つが届いたときには割れており、もう一つ喰ひ汚したのもあるという。できたらもう一度、作り直し、描き直してくれという秋成の要求は、いささか図々しく聞こえるが、相手が気の置けない月溪ゆえのことばである。

「菱湖子写本入手校合の事」とある「菱湖子」は、『五車反古』『続一夜松後集』『新雑談集』他に句の見える夜半亭門下の俳人菱湖であろう。先の『鐘筑波』や『よし野紀行』にも句を寄せている。半年間、菱湖が手元に置いて校合している写本とは何か不明。寛政後半（七、十年頃）十月一日付の実法院宛秋成書簡には、秋成の「神亀詞」を、書道において神童の誉れの高かった実法院の仁龍に清書させたものを菱湖がほしがっていることを記しているので、必ずしも俳諧関係の本ということにはならない。「黄檗門前」とは、宇治の万福寺か難波の瑞龍寺（鉄眼寺）か。ここは宇治万福寺門前を指すのであろうか。前年冬から秋成は病気がちで、大坂市中へさえ出ていないことが分かる。「橋本」は洛西梅宮神社の橋本経亮。「御愛妾」とは、天明三年に妻（もと鳥原の名妓雛路）を失ってから月溪が傍に置いた女性。「尼」は前年に剃髪した秋成の妻のため、すなわち瑚璉尼。「伯望」は前述のように月溪の字。「鶉兮」は、淡路庄隠棲後に秋成が使った号の一つである。

二、享和三年春寿算歌

巻紙（上下に朱線引き、未表具）。秋成自筆。本紙、縦二七・六×横四七二・七糎。これもまず翻刻を掲げるが、論

の便宜上、各歌の頭に算用数字で通し番号を付しておいた。またその下の（ ）の中は、後述の『桜花七十章』に私に付した通し番号。

享和三年春寿算歌

題桜花

1 (38) 高砂のをのへにたてるさくら花はやも嵐のさそひ
やはせむ

2 弓箭おひひさ駒なめてもの、夫の花見かてらに鳥狩する

岡

3 (56) さくら花さけるを見ればかほよ人衣にとほる光なりけり

4 (50) 我やと、吾はおもへと桜花あるし顔にも香に、ほひけり

5 (51) 巻向の檜原杉むら霞けりほのにさくらの色にこほれて

6 (24) 桜ちる木の本見れば久方の星のはやしに我は来にけり

7 (6) 園の池に小舟うかへてこかすればしま山さくらけふを盛に

8 (35) 手斧うつ木曾山人かまくり手の麻のころもに花散

かゝる

9 (44) ほのに見る花の光のうれしきは遠やま寺のあかつきの鐘

10 (18) ひな曇桜かもとを立くれはみとりの空に薫る春風

11 (48) いく春か人もとめこぬさくら花布留の山路の谷陰にして

12 雲雀鳴はるの野にて、遊ぶ我あすは桜の山路分なん

13 (55) 年ふかきさくらの枝は苔むして松を友なる齡をや
経む

14 (15) かつら木や高間の山の峰の寺さむき日影に花もさきけり

15 思ひあまり文よむ窓を明てみる軒の桜に夕日か、よふ

16 (8) 恋来れはよしのの山道風さえて花の林に雪降か、
る

17 (11) 鋤かへす春の水田に鳴蛙花催すと雨やよふ覽

18 (29) 紅のうす花桜染やますむら雨過る春の夕はえ

19 (16) 岩かねのこりしく山のさくら花春をときはの色に
みてまし

20 (67) 植継しわか木の花を見るなめに春やむかしのいろ
か思ほゆ

21 花の時は花をさゝくる神代より手向くさとは桜也けり

22 (57) 竜田彦風を守りの神山におのか時とやさくらはな
散る

23 (43) 梓弓誰はる山に家ゐして一日もおちす華は見ら
む

24 (70) あはと見て帰るそはかなをとめらか門ゆるされぬ
寺のさくらを

25 (23) 桜さくこゝのへちかきやよひ山うらく照す春の
光は

26 (53) かめにさす花はきのふの山つとをとひきて人のけ
ふも見はやす

27 (32) 落滝つ花にこもれるきさ山のすゑの小川のおとの
さやけさ

28 (14) 待ほと久しきからになめて我遅さくらともなか
めつるかな

29 (41) しめはへし苗代小田に影みえて年ふる塚の花も咲
けり

30 (54) 盃の流に更る春のよは衣を寒み花の下風
31 (61) 山かせの吹とはなしに玉たれの外の面に花のけさ

32 (59) ちぬの海の浪間にうかふ桜鯛網曳や花をちらすて
ふらむ

33 いし河のこまのたはれ男花にむれてぬしある人の帯など
らしそ

34 月見ればさかりの夜半を花の枝は青葉にかへて茂りあひ
にけり

35 (52) 咲うつむ谷のさくらの崖に立て我やはなそも雲に
乗人

36 風待てとまりする船いそ山に咲ちる花の日数へしかな

37 (22) 夜にかくれあひにし人に花山の道にゆきかふおも
なしや我

38 雁かへるこし路の雪は消はて、梅よさくらよ盛あらそふ

39 (58) 大滝をおとす筏は山かせにちらせる花になかれあ
ひつゝ、

40 (40) 御幸まつ野守か庵のさくら花又この春もあたに過
らむ

41 (62) なか、れとたのみこそせねさくら花ひと夜の風に
ちらんものかは

42 (39) 須磨の浦の礒山さくら咲にけり波こ、もとにたち
くとや見む

43 (66) 桜戸をおし明方の空みればけさもをへの花曇し
て

44 花おそき桜か本をとめくれは青根か嶺の外陰なりけり

45 (21) うつたへにとはぬものから去年の春花は枯しと告
やははいかに

46 此寐ぬる朝けに見ればやとりせし軒の尾上の花はさかり
に

47 (26) はるさめの野寺のしのやもるからにこよひ桜の陰
やたのまむ

48 (17) 船うけて誰物のねをあそふらん嵐の山の花のさか
りに

49 (60) 花さくらかさねて匂ふ袖の色に春をと、むる雲の
うへ人

50 (27) いのらぬも祈るも春のはつせ山道さりあへぬ花の
この頃

51 (42) あし柄のやまの桜にあふき見よ高峰の雪は常きえ
なくに

52 (37) 山里は夕暮さむみさくら花ちりはそめねと匂ひし
めりて

53 (7) 根にかへる花としきけはたのまる、又こん春も木
末にぞ見む

54 (34) 御渠水花そ流る、大宮の内にも春はとまらさりけ
り

55 おくれしと追こし人にあはぬかな心を空の花の山ふみ

- 56 打まれてきのふは見しを桜はな雨さむけなる陰と成にき
 57 (13) 芹たつの群とふ春の空見れば雲井に花の咲て乱る、
 58 (9) 汐なれし生田の森の桜花春の千鳥の啼てかよへる
 59 (4) 春雨のほろ、とそ鳴かた岡のき、すも花の散やを
 しめる
 60 をしと思ふ心をそへておくれはや花おもけにもみゆる一
 枝
 61 (10) しめはへし垣穂なからに名の木てふ花はこの春か
 くも老にき
 62 (3) おもふ事あらぬ枕に花の香のあさらにかをる春の
 曙
 63 (20) 筑波嶺の神やはをしむ雲こめて見し人もなき花そ
 さくてふ
 64 (63) いさこ、をやとりかへてん軒にみる花はあすもや
 散んともへは
 65 (2) 唐やまと声にあけつ、うたふ哉日はゆふ暮の花の
 木のもと
 66 (1) 宮人の春のいとまを(「の」ト改) 山ふみを待とり
 かほの花の古寺
 67 (69) 故さとの久しき代より飛鳥風吹におひ継花も見え
 けり

- 68 (47) 朝鳥のこゆる翅に色なから峰のさくらは散そめに
 けり
 69 優婆塞か行なふ道の夏山に今を盛の華は幾本
 70 (28) ほと、きすまたきはつねの卯月山花のなこりをか
 ねてたつねむ
 七十翁無腸(花押)
 書記

この作品には異文があり、その異文は浅野三平「秋成の桜花七十章」(『女子大國文』46、昭42・7、後に『増訂 秋成全歌集とその研究』おうふう、平19等に所収)によつて紹介されている。最初に一言する。所収歌の対照のため、本来ならば『桜花七十章』の全文を示すべきであるが、紙幅の關係もあり、『上田秋成全集』第十二巻の『寿算歌桜花七十章』の翻刻に拠られたい。

まず、この『享和三年春寿算歌』と『桜花七十章』の違いであるが、こちらが巻紙(卷子本)であるのに対して、『桜花七十章』は、短冊七十枚を一面に二枚ずつ貼り込んだ帖仕立てになっている。

両本の相違は、まず第一に、この『享和三年春寿算歌』

には、『桜花七十章』になかった「享和三年春寿算歌」の題が巻頭に、「七十翁無腸（花押）／書記」という奥書が巻末にそれぞれあるという点である。『桜花七十章』も、表紙には「寿算歌桜花七十章」という秋成自筆の題簽があつて、誰かの七十賀に詠まれたものであることは確実であり、しかも享和・文化頃の筆跡から、それが秋成自身の七十賀ではないかという推測はできたものの、今回のこの『享和三年春寿算歌』の題と奥書を得て、享和三年に七十を迎えた秋成が、自祝のために詠んだ作品であることが確定する。秋成は香具波志神社の神から与えられた六十八歳が自分の寿命だと信じていた。その寿命を全うした享和元年の九月には、神恩に感謝しつつ六十八首の自詠に知人の作も加えて奉納し（『猷神和歌帖』、翌二年の三月には、西福寺の紅梅樹下に寿蔵（生前墓）を営んでいる。秋成にとつて享和三年の春は、思いがけず迎えることのできた七十の春であり、感慨は一入のものであつたらう。

さらに、『桜花七十章』と『享和三年春寿算歌』の違いは、翻刻（に付した番号）を見れば明らかであるが、所収歌に出入りがあることと、所収歌の配列（順序）が異なつてい

るということである。『桜花七十章』の題簽も秋成自筆ではあるが、この帖の姿が元のままか否か、あるいは帖に現在張り込まれている順序が、秋成の意図したものであるか否か、確証はない。

所収歌の出入りについては、漢字が平仮名になつていたり、テニヲハや一語程度の微細な違いは除いて、両本に共通していると思なせるものは五十六首である。『享和三年春寿算歌』にあつて『桜花七十章』に見られない歌は、2、12、15、21、33、34、36、38、44、46、55、56、60、69の十四首。うち、まったくの新出歌は12、15、21、34、38、46、60、69の八首である。残りの六首は、『藤篋冊子』に採られていて、既知のものである。

いずれが初稿であるか、両本に共通する歌を、『藤篋冊子』を含めた三者の歌形の異同の比較を通して、あるいは短冊と卷子の形態の違いに注目しても、一概にどちらが『藤篋冊子』により近く、あるいはどちらが先か後かを決めることは難しい。今は、年次と年齢を記した『享和三年春寿算歌』を、ひとまず初稿と考えておくことにする。

（本学教授）

